

令和 6 年 6 月 24 日現在

機関番号：32720

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K20846

研究課題名（和文）自閉スペクトラム症児等への継続的介入方法の開発と効果検証法の検討

研究課題名（英文）Development of Continuous Intervention Methods for Toddlers with Autism Spectrum Disorder and Examination of Methods for Evaluating Their Effectiveness

研究代表者

黒田 美保（Kuroda, Miho）

田園調布学園大学・人間科学部・教授

研究者番号：10536212

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、地域コミュニティの中で、幼児期早期から学童期に至るまでをカバーする自閉スペクトラム症などの対人コミュニケーションに弱さのある子どもを対象とした、継続的療育支援プログラム開発の基盤作りと支援の効果をモニタリングするための検査等のパッケージ化を目指した。東京と地方の児童発達支援事業所で、JASPER（カルフォルニア大学で開発された自閉スペクトラム症への早期から学童期までをカバーする支援プログラム）の方略を実施し、療育の前後での子どもたちの変化を調べた。変化の指標としては、Vineland-II適応行動尺度、新版K式発達検査が子どもの変化を的確に捉えられることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現在の日本には、幼児期早期から学童期に至る自閉スペクトラム症を中心とする対人コミュニケーションに弱さのある子どもを対象とした、地域コミュニティの中で実施できる継続的療育支援プログラムがなく、また、支援の効果を調べる心理検査も明確化されていない。したがって、本研究の意義は以下の3点となる。幼児期早期から学童期に至るまでをカバーする継続的療育支援プログラムの開発基盤となる。発達障害の専門家ではなく、地域コミュニティで保育士や児童指導員などでも実施できるプログラムを開発する基盤となる。療育効果を測定するための適切な心理検査等評価パッケージの検討と提案を行う。

研究成果の概要（英文）：In this study, we aimed to develop a continuous intervention program for children with autism spectrum disorder (ASD) and other communication difficulties, covering early childhood to school age, within regional communities. The goal was to establish a foundation for such an intervention program and to compile various tests to monitor its effectiveness. We implemented interventions based on the JASPER (Joint Attention, Symbolic Play, Engagement, and Regulation) program, developed by the University of California, at child development support centers in Tokyo and rural areas. We examined changes before and after the intervention. The participants were toddlers aged between 19 and 72 months, and the effects of the intervention were observed across this wide age range. The Vineland Adaptive Behavior Scales, Second Edition, and the New Edition of the K-Test of Development were found to accurately capture the effectiveness of the intervention.

研究分野：臨床発達心理学

キーワード：自閉スペクトラム症 幼児 療育支援 支援効果の測定 JASPER Vineland-II適応行動尺度 モニタリング 視線追跡計測

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 【背景】

自閉スペクトラム症 (Autism Spectrum Disorder: 以下ASD) は、対人コミュニケーションとこだわりの2領域の障害を主徴候とする発達障害である。その有病率は1～2%と言われ、決して稀な障害ではない。また、診断がつくほどではないが、対人コミュニケーションに弱さのある子どもも多い。ASDについては、1歳台からの早期介入より対人コミュニケーションの改善が見られるという報告がされ、欧米では数種類の効果検証のされた治療教育(療育)プログラムが実施されている。この中でも、特に、カルフォルニア大学ロサンゼルス校(UCLA)のKasari教授の開発したJASPERは、1歳から7歳台までの広い年齢帯に実施できる。また、心理士が実施するだけでなく、保育園や学校で保育士・教師による実施においても大きな効果が示されている。JASPERとは、Joint Attention Symbolic Play Engagement and Regulation のAcronymで、JA(共同注意)、SP(象徴遊び)、E(関わり合い)、R(感情調節)の4つの領域の発達促進を通して、ASD児の中核的症状の1つである「対人コミュニケーション」の改善をしていくプログラムである。そのコンセプトは、子どもの発達や興味に合わせて、遊びを通して、相互的な関わりを引き出すことで、自発的コミュニケーションを育もうとするものである。

一方、現在、我が国では、こども家庭庁の施策により、地域コミュニティに発達障害のある子どものために児童発達支援センターや事業所が作られているが、効果検証がされた、つまりエビデンスのある早期介入方法が実施されているとは言い難い。そもそも米国よりも発達障害を専門とする医師や公認心理師が少なく、エビデンスのある療育を受けられる子どもの数は非常に限られていて、地域コミュニティで乳幼児から学童期までの効果的な療育支援を継続的に受けることは難しい状態である。また、支援効果の検討については、6ヶ月ごとのモニタリングが義務付けられているが、効果の測定方法は決められておらず、モニタリングに客観的な指標を用いているとは言い難い状態である。

## 【目的】

本研究では、地域コミュニティの中で実施できる、乳幼児から学童期までのASDなどの対人コミュニケーションに弱さのある子どもを対象とした、継続的療育支援のプログラム開発の基盤作りを目指す。先行研究で、心理士の実施によるJASPERの有効性が示されているので、本研究では、児童発達支援施設の多職種による実施の効果を検討する。

同時に、療育支援プログラムの効果をモニタリングする上で有効な検査パッケージについて研究を行う。モニタリングに用いる検査については、自閉症特性を調べる検査や適応行動、発達水準を調べる心理学的検査以外に Gaze Finder(ゲーズ・ファイダー:視線追跡計測システム)という生理学的指標(人への注目への変化を測定する)も有効であるかを検討する。これは、機械さえあれば心理検査を実施する心理士がいなくとも、また、短時間で支援効果を把握できるという点で、有効性が示されれば利用価値が高いものと考えられる。

最終的には、広い年齢層に有効な早期支援方法の提案と子どもの対人コミュニケーション

ンの変化を把握できる感度の良い検査を見出し、支援効果を評価するための検査パッケージを提案することを目的とする。

### 【方法】

対象：東京および地方都市の児童発達支援事業所で、JASPERのコンセプトを取り入れている施設を選び、そこに通う子どもを対象とした。施設数は、東京で1、地方で2である。

手続き：児童発達支援事業所で公認心理師、保育士、児童指導員、作業療法士などが実施できる継続的支援のプログラムの基盤となるために、JASPERの基本的コンセプトを学んだ職員に対して月1回のスーパーバイズを通して療育スキルの向上を目指した。支援方法は、施設や子どものニーズによって異なり、個別指導のみ1時間、あるいは集団活動の中で個別指導を1時間程度入れる形で行われた。頻度は子どもによって異なり、週1回から4回までであった。

評価尺度としては、Vineland-II適応行動尺度日本版：Vineland Adaptive behavior test-second edition（0歳から92歳までを対象とし、コミュニケーション、社会性、日常スキル、運動スキルの4領域の適応行動指数とその総合点である適応行動総合点を求めることができる。）、新版K式発達検査（姿勢-運動、認知-適応、言語-社会の3領域の発達水準および発達全体の水準を調べられる検査）を行った。また、JASPERで短期目標を立てる際に実施される簡易な検査であるSPACEを行った。SPACEは、Short Play And Communication EvaluationのAcronymで、子どもの社会的コミュニケーションと遊びを測定する検査である。検査者と子どもが個別で行うもので、積木、ドールハウスや人形など日常的な玩具を使って、子どもの遊びの水準、自発と応答の共同注意スキル、要求スキルを容易に調べることができる。所要時間は15分程度である。また、診断に用いるADOS-2（Autism Diagnostic Observation Schedule-Second version：自閉症診断的観察尺度第2版）も、一部の施設で実施した。生理指標として我が国で開発されたGaze Finderを用いた。これはキャリブレーションが容易であり、幼児の視線追跡に適している。

Gaze FinderとADOS-2は一部の施設で実施されたが、Vineland-II、新版K式発達検査、SPACEは共通で行った。評価については、療育開始の前と最終日、あるいは6か月程度が経過したところで実施した。

倫理：本研究は、所属大学の倫理委員会の承認を得て実施された。

ICO：開示すべき利益相反はない。

### 【結果】

参加者：コミュニティの児童発達支援事業所に通う27名の幼児（男子22名、女子5名）、通所開始年齢は、平均41ヶ月（最年長72ヶ月・最年少19ヶ月）である。通所期間の平均は8ヶ月（最長19ヶ月・最短4ヶ月）である。

評価指標に見られた変化：Vineland-II適応行動尺度、SPACE、新版K式発達検査、ADOS-2、

Gaze Finderの結果について、各領域や項目の得点について対応のあるt検定を行なった。また、効果量についてはCohen's dを求めた。解析にはIBM SPSS Statistics 26を用いた。発達指数の姿勢・運動領域については、新版K式発達検査では、4歳以上の運動能力測定が難しいため、今回は介入前後の比較からは省いた。以下が療育支援前後で有意な改善が見られた指標である。

Vineland-II適応行動尺度の評価点では、コミュニケーション領域 ( $t(25)=2.85, p<.01, d=.55$ )、日常生活スキル領域 ( $t(25)=2.94, p<.01, d=.57$ )、社会性領域( $t(25)=3.59, p<.01, d=.69$ )、および適応行動総合点( $t(25)=2.85, p<.01, d=.55$ ) で有意差がみられた。SPACEでは、要求の手を伸ばす行動 ( $t(21)=2.67, p<.05, d=.56$ )、要求の指さし ( $t(21)=2.59, p<.05, d=.54$ )、共同注意への反応 ( $t(21)=2.35, p<.05, d=.49$ )、共同注意の見せる行動 ( $t(21)=2.32, p<.05, d=.49$ )、1対1の組み合わせ遊び ( $t(21)=3.92, p<.01, d=.82$ )、前象徴遊び ( $t(21)=2.66, p<.05, d=.56$ )、象徴遊び ( $t(21)=4.10, p<.01, d=.86$ ) の有意な増加が見られた。新版K式発達検査で測られた発達水準については、有意な改善が見られたのは言語・社会領域 ( $t(16)=3.05, p=.01, d=.72$ ) であった。ADOS-2については、アルゴリズムの対人的感情 ( $t(13)=4.55, p<.01, d=1.18$ )、限定的・反復的行動 ( $t(13)=2.69, p<.05, d=.70$ )、合計得点 ( $t(13)=5.22, p<.01, d=1.35$ ) について有意差がみられた。また、一部の子どもについて、実際の事業所の職員による子どもの評価も行ったが、これらの指標で改善が見られた子どもへの評価も改善していた。

さらに、有意差が認められた評価指標について介入前後の差を求め、開始年齢および療育期間との相関を調べたところ、開始年齢とVineland-II適応行動尺度のコミュニケーション領域 ( $r=-.48, p<.05$ )、SPACEの共同注意への反応 ( $r=-.70, p<.01$ )、1対1組み合わせ ( $r=-.51, p<.05$ )、前象徴遊び ( $r=-.47, p<.05$ ) に有意な相関が見られた。また、療育期間と前象徴遊びに有意な相関が見られた ( $r=.61, p<.01$ )。

#### 【考察】

研究期間中に新型コロナが流行し、事業所に通えない子どもが多くなったため、長期にわたる効果を見ることはできなかったが、半年や1年でもかなりの改善が見られ、それを把握できる検査バッテリーを見出すことができた。

基盤研究(B)17H02720「自閉スペクトラム症児の早期支援法JASPERの効果検証と社会性改善要因の検討」において、発達障害を専門とする心理士が実施した場合のJASPERの効果が示されたが、専門職だけでなく、児童指導員や保育士といった職員による実施であっても、社会性の改善や言語コミュニケーションの発達促進が確認された。むしろ、児童発達支援事業所でのJASPERのコンセプトを活かした療育の方が広範な領域に改善が見られた。これは、専門職以外であっても地域コミュニティの中で療育支援を頻度高く行うことがより効果をもたらすことを示している可能性がある。

社会性の改善は、今回Vineland-II適応行動尺度を使って測定したが、Dawson et al.もEarly

Start Denver Model (JASPERと同じNDBIsの1つで、子どもとの自然な関わりの中で社会性や認知面、日常生活スキルなどの幅広い側面の発達促進を行うプログラム)の効果検証において、Vineland-II適応行動尺度を使用して、社会性の変化を測定しており、その研究でも感度の高さが確認されている。また、前述した基盤研究においてもVineland-II適応行動尺度で効果が示されていた。こうした点から、Vineland-II適応行動尺度は療育効果を見る上で、非常に有効であると言える。また、直接的な言語発達を確認する上で、新版K式発達検査は有効であり、また、共同注意や要求行動の直接的な行動の変化を見る上では、SPACEも非常に有効である。

さらに、療育開始年齢や療育期間と効果の関係をみると、開始年齢と支援効果の関係から、年齢が低い段階で療育支援を開始した方がコミュニケーションの伸びが良いことや遊びの多様性が促進されることが示唆された。期間については、長く療育を続けるほど、遊びの多様性が促進された。したがって、できるだけ早期に療育支援を開始し継続することが重要だと考えられる。全国で作られている児童発達支援事業所で、一般の職員によって行われる、遊びという楽しい活動の中で子どもに負担のない形で行動介入を行うことにより、大きな支援効果が得られることが明らかになった。

今回の研究では、コロナ禍の影響で、長期の支援効果や長期の支援効果を確認するための検査バッテリーについては検討できなかった。今後は、こうした点について調べる必要はあるが、本研究の結果からは、心理士以外の実施によるJASPERのコンセプトを活かした支援の効果が認められた。したがって、このJASPERのコンセプトを用いたプログラムの全国の児童発達支援施設での実施が望まれることと、支援効果の測定には、Vineland-II適応行動尺度と新版K式発達検査、及び、SPACEをバッテリーとして組んでいくことが望ましいと考えられる。ADOS-2を実施できる施設においては、それも有効な評価ツールと考えられる。実際には、前者の2つは1年1回、短時間で実施できるSPACEは半年おきに行って客観的なモニタリングをできるようにしていくことが望ましい。

## 【文献】

- ・ Kasari, C., Gulsrud, A.C., Wong, C., Kwon, S., & Locke, J. (2010). Randomized controlled caregiver mediated joint engagement intervention for toddlers with autism. *J Autism Dev Disord*, 40, 1045-1056.
- ・ Shire, S. Y., Shih, W., Chang, Y. C., & Kasari, C. (2018). Short Play and Communication Evaluation: Teachers' assessment of core social communication and play skills with young children with autism. *Autism*, 22(3), 299-310.
- ・ 黒田美保, 井潤知美, 浜田恵, & 稲田尚子. (2022). JASPER が日本の自閉スペクトラム症幼児におよぼす効果の予備的検討. *帝京大学心理学紀要*, 26, 1-11.
- ・ 浜田恵, & 黒田美保. (2021). 社会的コミュニケーションのアセスメント技法 SPACE の妥当性に関する予備的検討. *名古屋学芸大学ヒューマンケア学部紀要/名古屋学芸大学ヒューマンケア学部紀要編集委員 編*, (14), 25-33.

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計21件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 黒田美保	4. 巻 23
2. 論文標題 発達支援における包括的アセスメント	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 臨床心理学	6. 最初と最後の頁 533-539
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 黒田美保	4. 巻 51
2. 論文標題 小児リハビリテーションに必要な評価法 日本版Vineland- 適応行動尺度	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 総合リハビリテーション	6. 最初と最後の頁 645-650
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 黒田美保	4. 巻 33(印刷中)
2. 論文標題 適応行動とそれに関するアセスメント	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 LD研究	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 浜田恵	4. 巻 32
2. 論文標題 児童発達支援における自閉スペクトラム症幼児の社会性発達支援	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 乳幼児医学・心理学研究	6. 最初と最後の頁 43-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 稲田尚子	4. 巻 10
2. 論文標題 臨床心理検査の現在 (6) 発達障害関連 ;Vineland-II適応行動尺度	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 シンリンラボ第10号 (2024年1月号)	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kuroda Miho, Kawakubo Yuki, Kamio Yoko, Yamasue Hidenori, Kono Toshiaki, Nonaka Maiko, Matsuda Natsumi, Kataoka Muneko, Wakabayashi Akio, Yokoyama Kazuhito, Kano Yukiko, Kuwabara Hitoshi	4. 巻 17
2. 論文標題 Preliminary efficacy of cognitive-behavioral therapy on emotion regulation in adults with autism spectrum disorder: A pilot randomized waitlist-controlled study	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 PLOS ONE	6. 最初と最後の頁 e0277398
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1371/journal.pone.0277398	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 浜田恵、黒田美保	4. 巻 15
2. 論文標題 自閉スペクトラム症幼児に対する社会性発達支援による視線パターンの変化 : 視線計測装置Gazefinderを用いた一事例の検討	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 名古屋学芸大学ヒューマンケア学部紀要	6. 最初と最後の頁 93-101
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 実吉綾子, 稲田尚子, 出水友理亜	4. 巻 16(2)
2. 論文標題 シンポジウム「発達障害児への視覚的支援のエビデンス」文字の読みを支える視覚認知機能とその発達支援について.	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 眼科臨床紀要	6. 最初と最後の頁 99-104
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 稲田尚子	4. 巻 43(169)
2. 論文標題 関係性の発達を支える. 発達	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 発達	6. 最初と最後の頁 45-51
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 稲田尚子	4. 巻 70(5)
2. 論文標題 注意を向け、落ち着くのが難しいことの見立てと診断	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 教育と医学/教育と医学の会 編	6. 最初と最後の頁 431-437
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 浜田恵、黒田美保	4. 巻 15
2. 論文標題 自閉スペクトラム症幼児の社会性発達支援の早期介入による 視線パターンの変化 : Gaze Finderを用いた一事例の検討	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 名古屋学芸大学ヒューマンケア学部紀要	6. 最初と最後の頁 93-101
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 黒田美保	4. 巻 21
2. 論文標題 自閉スペクトラム症への早期支援の最前線	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 子どもの健康科学	6. 最初と最後の頁 59-62
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 黒田美保	4. 巻 11
2. 論文標題 コミュニティーでの支援を実現するJASPERプログラム	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 子どものこころと脳の発達	6. 最初と最後の頁 28-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.34572/jcbd.11.1_28	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計16件 (うち招待講演 4件 / うち国際学会 3件)

1. 発表者名 Miho Kuroda
2. 発表標題 Current Status and Challenges of Early Detection and Intervention for Toddlers with ASD in Japan.
3. 学会等名 The 11th Congress of ASCAPAP (第11回アジア児童青年精神医学会 教育講演) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Miho Kuroda, Megumi Hamada, Naoko Inada, Masatsugu Tsujii
2. 発表標題 The Effects of JASPER on Japanese Toddlers with Autism Spectrum Disorder: Preliminary Study
3. 学会等名 INSAR 2024 Annual Meeting (自閉症国際学会2024年年次大会 ポスター発表) (国際学会)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Miho Kuroda, Ayako Saneyosi, Megumi Hamada, Naoko Inada
2. 発表標題 Evaluating the Impact of JASPER Intervention on Theory of Mind in Toddlers with ASD
3. 学会等名 INSAR 2024 Annual Meeting (自閉症国際学会2024年年次大会 ポスター発表) (国際学会)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 黒田美保
2. 発表標題 発達の視点に立った 子どもの見方と関わり方
3. 学会等名 包括システムによる日本ロールシャッハ学会 第28回大会 (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 黒田美保
2. 発表標題 自閉スペクトラム症の心理アセスメント：診断につながるアセスメント
3. 学会等名 第64回児童青年精神医学会総会 委員会セミナー
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 黒田美保, 實吉綾子, 浜田恵, 稲田尚子
2. 発表標題 自閉スペクトラム症幼児への早期支援の効果検証 ~アイトラッキングを用いた検討~
3. 学会等名 第64回児童青年精神医学会総会 ポスター発表
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 黒田美保
2. 発表標題 欧米の社会性発達支援とあそびのプログラム
3. 学会等名 第35回日本発達心理学会 自主シンポジウム「児童発達支援事業所における幼児の社会性発達支援：あそびを通して子どものコミュニケーションを支援するプログラム」の試み」(話題提供者)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 黒田美保
2. 発表標題 適応行動とそのアセスメント
3. 学会等名 日本LD学会第7回研究集会：新時代のアセスメント 認知特性と適応の視点から シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 浜田恵
2. 発表標題 児童発達支援と地域の併行通園先との橋渡しとしてのあそびのプログラム
3. 学会等名 第35回日本発達心理学会 自主シンポジウム「児童発達支援事業所における幼児の社会性発達支援：あそびを通して子どものコミュニケーションを支援するプログラム」の試み」（企画・司会・話題提供者）
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 黒田美保、尾崎康子、東敦子（話題提供）
2. 発表標題 自主シンポジウム自閉症支援プログラムの効果検証（ジャスパー、ふれあいペア レントプログラム、ペアレント・プログラムなど）
3. 学会等名 日本発達心理学会第34回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 浜田恵（大会シンポジウム話題提供）
2. 発表標題 児童発達支援における自閉スペクトラム症の早期支援
3. 学会等名 第32回日本乳幼児医学・心理学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 稲田 尚子(帝京大学) 深野 理早(一般社団法人ころん) 田中 優貴(一般社団法人ころん)
2. 発表標題 児童発達支援事業所における早期集団支援の有効性
3. 学会等名 日本発達心理学会第34回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 黒田美保
2. 発表標題 関係性を基盤とした自閉スペクトラム症の子どもへの早期支援
3. 学会等名 LD学会(招待講演)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計9件

1. 著者名 (監修)辻井正次・(編集代表)高柳伸哉・(編者)西牧謙吾・岡田 俊・笹森洋樹・日詰正文	4. 発行年 2024年
2. 出版社 金剛出版	5. 総ページ数 324
3. 書名 発達障害支援者のための標準テキスト	

1. 著者名 (著) Frankel, Fred, (監訳)辻井正次, (訳)足立匡基, 村山恭朗, 浜田恵, 明翫光宜, 高柳伸哉, 増山晃大	4. 発行年 2023年
2. 出版社 遠見書房	5. 総ページ数 352
3. 書名 子どもと親のためのフレンドシップ・プログラム : 人間関係が苦手な子の友だちづくりのヒント30	

1. 著者名 (著) Kasari., Connie (監訳) 黒田美保, 辻井正次 (訳) 浜田恵, 稲田尚子, 井澗知美	4. 発行年 2024年
2. 出版社 金剛出版	5. 総ページ数 -
3. 書名 JASPERマニュアル (仮称)	

1. 著者名 津川律子、黒田美保	4. 発行年 2023年
2. 出版社 金子書房	5. 総ページ数 170
3. 書名 これからの現場で役立つ臨床心理検査【事例編】	

1. 著者名 津川律子、黒田美保	4. 発行年 2023年
2. 出版社 金子書房	5. 総ページ数 176
3. 書名 これからの現場で役立つ臨床心理検査【解説編】	

1. 著者名 黒田美保 / 編著 繁樹 算男	4. 発行年 2023年
2. 出版社 誠信書房	5. 総ページ数 238
3. 書名 「臨床における心理検査の使用」心理・教育・人事のためのテスト学入門	

1. 著者名 黒田美保 / 編著サトウタツヤ、鈴木 朋子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 新曜社	5. 総ページ数 296
3. 書名 「Vineland-II適応行動尺度」心理検査マッピング	

1. 著者名 黒田美保 / 編者齊藤万比古 飯田順三	4. 発行年 2022年
2. 出版社 じほう	5. 総ページ数 584
3. 書名 「ADHDと適応行動」注意欠如・多動症ADHDの診断・治療ガイドライン第5版	

1. 著者名 辻井正次（監訳）子どもと親のためのフレンドシップ・プログラム 人間関係が苦手な子の友だちづくりのヒント30.	4. 発行年 2022年
2. 出版社 遠見書房	5. 総ページ数 352
3. 書名 子どもと親のためのフレンドシップ・プログラム 人間関係が苦手な子の友だちづくりのヒント30.	

〔出願〕 計0件

〔取得〕 計1件

産業財産権の名称 発達支援システムおよび発達支援方法	発明者 辻井 正次、曾我部哲也、浜田恵、黒田美保、香取みずほ他	権利者 同左
産業財産権の種類、番号 特許、特願2023-056805	取得年 2023年	国内・外国の別 国内

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	辻井 正次  (Tsuji Masatugu)  (20257546)	中京大学・現代社会学部・教授    (33908)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	浜田 恵  (Hamada Megumi)  (00735079)	中京大学・心理学部・准教授    (33908)	
研究分担者	稲田 尚子  (Inada Naoko)  (60466216)	大正大学・心理社会学部・准教授    (32635)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関